
ドビュッシーによる音楽的表象としての「扇」

—マラルメのテキストの詩的表象との関係をめぐって

関野 さとみ

発表要旨

本発表は、クロード・ドビュッシー（1862-1918）晩年の歌曲《扇》（1913）の音楽構造に、ステファヌ・マラルメ（1842-98）のテキスト内容、さらにマラルメの詩的表象としての「扇」がどのように関わっているのかを探る試みである。《扇》は、ドビュッシー自ら「非凡なもの」と呼んだこの連作歌曲の中でも調性からの離脱が最も著しく、オクタトニックや全音音階の顕著な使用など、より抽象的な響きの性質を備える。マラルメの詩、さらに詩的表象としての「扇」を考察し、歌曲の音楽構造との関係を探ることで、歌曲《扇》におけるドビュッシーの音楽的意図を探り、また、晩年のドビュッシーが目指した歌曲におけるテキストと音響の関係について読み解いていきたい。

マラルメが好んで詩に使用したモチーフの一つである「扇」は、マラルメの一連の「扇」詩群の中で、様々な詩的イメージを生み出す表象としての機能を備える。「扇」は日常のありふれた道具であると同時に、詩的イメージを自由に延べ広げることができる点で、詩において「現実」と「非現実」の世界を結びつける媒体として機能する。さらに開かれた形状が鳥の「翼」のイメージと重なり、また発音上も 'éventail' —— éventer (扇ぐ) / vent (風) / aile (翼) を喚起することによって、「飛翔」のイメージ、また羽ばたき (扇ぎ) といった運動性と不可分に結び付けられる。歌曲のテキストに使用された詩でも、「扇」はこれら一連の詩的イメージの喚起によって、少女 (マラルメ嬢) の内面における「現実」と「想像」の世界の対立と緊張関係、その狭間を浮遊する心の情景を創り出す詩的表象として機能する。マラルメはさらに、実物の扇が同じひとつの中心軸で結ばれ、一連の襞 (Plis) によって諸区分に区切られて成り立つことも、詩の構造に反映させている。

ドビュッシーはこの、マラルメの詩的表象としての「扇」が喚起する「現実 (日常)」と「想像 (非日常)」の世界の緊張関係、またその開閉の状態によって生み出される運動性や、詩的イメージを緻密に読み取り、自らの音楽に反映させている。またテキストの詩節ごとの音響を差異化することで、歌曲の響きの全体構造を、一連の折り襞によって諸区分に区切られると同時に、一続きの連続体でもある「扇型の構造」に形成している。全体の連続性、また各セクションの音響の差異性、方向性は、テキストの詩的イメージの拡がりやダイナミズムを巧みに反映する。

日常と非日常、あるいは具象と抽象の間を揺れ動き、その両方を含み持つマラルメの詩的表象としての「扇」の音楽的解釈を通して、ドビュッシーはいわば「音楽的表象としての扇」を実現させているといえよう。そこには、歌曲における「言語と音楽」の新しい秩序を見出そうとする、ドビュッシーが晩年にたどりついた方向性の一端が示されている。

(桐朋女子高等学校)